

地域社会研究のための職業概念の再検討

職業社会学から労働／産業社会学へ

東京大学 武岡 暢

1 背景と目的

報告者はこれまでに新宿歌舞伎町のフィールドワークに基づいた研究を行ってきた。その背景には、都市社会学、地域社会学における「コミュニティ」研究がはらむ住民中心主義の相対化という目論見があった。経験的には歌舞伎町を対象として取り上げることによって、理論的、方法的には「ある空間において」「(住民だけでなく) 出入りする人びとをも含めた多様な担い手による」「活動に焦点を当てる」という戦略によって、この目的の達成が目指された。

このうち3点目の「活動に焦点を当てる」というのは、コミュニティ研究がどちらかといえば「住民」という主体を（曖昧さを抱え込みながら）焦点化していたことに対置される。同一主体が当該空間に根付かずとも、活動はその担い手（主体）の交代を経ながら再生産されていく。これは構成員の流動性が高い都市的な地域社会においてとりわけ有効で、歌舞伎町のような対象においては不可欠な視座であった。このような「活動」の一定ていど組織化されたものは、既存の概念のなかでは「職業」に近似してくる。たとえば歌舞伎町は住民等の主体によってではなく、様々な職業の活動によって構成される地域社会であると見ることが可能である。

本報告の目的は、以上のような背景に基づいて、地域社会を記述するための枠組みとして従来の住民論に対して職業論とでも呼ぶべきそれを提案することである。

2 方法

そこで、本報告では日本の社会学における「職業」概念の主要な用法や研究の脈絡について検討する。その際、適宜アメリカ社会学における類似の領域も参照する。素材として取り上げるのは尾高邦雄の「職業社会学」の構想や、その後に職業社会学と入れ替わりに確立してくる産業社会学、労働社会学の脈絡、また階層研究における「職業」の利用などであるが、そのみならず都市社会学や都市研究における「職業」の利用についても検討する。

3 結果

尾高の職業社会学は従来、尾高のウェーバリアンとしての側面から評価されることが主であったが、むしろジンメルからの影響を重視する必要性が示唆された。ジンメルの「社会と個人」観、またそれに連なる「職業」観には、きわめて微妙かつラディカルな議論が含まれており、こうしたニュアンスは1950年代以降の尾高からはむしろ失われていく。アメリカ社会学を実地に見聞し、その影響を強く受けた尾高が志向したのは、労働研究、産業研究のフォーマライゼーションであって、「職業」概念はその過程で操作化され、道具的に使用される用法に限定されていく。結果的に今日においても「職業」は生計維持と結びついた概念として流通しているが、このことはむしろ福祉社会学的な観点からは再考の余地がある。

4 結論

地域社会を構造化する重要な要素としての人びとの「活動」を「職業」という観点から捉えるためには、職業概念を生計維持から切り離すか、新たな語のもとにそうした「活動」を指し示す概念の付置を提起する必要がある。ドイツ語の経営 Betrieb 概念のもとに行われるドイツの「経営社会学」のように、対象を指し示すカテゴリーには様々な選択肢があり、報告者は都市研究の記述枠組みとして有用な「対象化」の方法として「活動」を提案したいと思う。